

学習活動が成立するための雰囲気づくり

－保健体育等における“聞く姿勢づくりから”－

石井 悦夫

はじめに

本稿の視点について

授業が始まっているにもかかわらず、級友としゃべって授業に集中できない数人の生徒がやや騒がしい。「静かに！」と言って授業を進めたが、学級がざわついた雰囲気となり、工夫してきた授業展開がうまく進められない。

つい大声で「静かに！」と何度も注意することになり、その結果、流しただけの授業になってしまった。

落ち着きのない生徒が多い学校で、多くの教師が経験している事例である。

そこで、本稿は次の下線部分である“学習活動が成立するための雰囲気づくり”のため、学習態度の在り方指導を“聞く姿勢づくりから”としてまとめたものである。

【生徒指導提要】 文部科学省 平成22年3月発行
第一章 生徒指導の意義と原理

第2節 教育課程における生徒指導の位置付け
2 学習指導における生徒指導

学習指導における生徒指導としては、次のような二つの側面が考えられます。

一つは、各教科等における学習活動が成立するために、一人一人の児童生徒が落ち着いた雰囲気の下で学習に取り組めるよう、基本的な学習態度の在り方等についての指導を行うことです。

もう一つは、各教科等の学習において、一人一人の児童生徒が、そのねらいの達成に向けて意欲的に学習に取り組めるよう、一人一人を生かした創意工夫ある指導を行うことです。

前者は、一人一人の児童生徒の学習場面への適応をいかに図るかといった生徒指導であり、後者は、一人一人の児童生徒の意欲的な学習を促し、本来の各教科等のねらいの達成や進路の保障につながる生徒指導です。・・・社会的な自己実現や自己指導能力の育成にもつながります。

「聞く姿勢づくりから」について

授業における聞く姿勢づくりは、次の3点を項目立てとした。

- ① 場に応じた指導の工夫
- ② 約束事の確立
- ③ 信頼関係の構築

例えば、②の約束事については、小学校では学級担任がほとんどの教科を担当するため、学級で示された約束事はどの教科でも進めやすく、児童も各教科共通の約束事として理解していく。

この分野に力を入れている小学校では、全校児童共通の約束事が示され、学級担任は他の具体的な内容を加えて進めている。

- ・発表名人(略)
- ・お話名人(略)
- ・聞き名人

聞き名人

- ・あ 相手の顔を見て
- ・い 意見を持ち
- ・う うなずきながら
- ・え 笑顔で
- ・お 終わりまで聞く

しかし、中学校では、教科担任制のため教科の独自性により研究授業等で協議されない限り一人一人の教師の指導意識・指導感覚に委ねられている現状がある。

教師は、常に自らの指導を見つめ直す意識が必要であるが、場合によっては、自らの指導観をも大きく変える勇気を持たなければならない。

①～③は関連が深く、明確な分類とはしていないが、本稿を通して授業者自らの対応が見えてくると考える。

落ち着いた雰囲気が作れず、負担に感じている採用間もない若い先生の悩みの多くがここにあると思われる。

本稿は、神奈川県内の小・中学校80校への記述式アンケート結果を参考に、中学校教育に長年携わってきた経験を踏まえてまとめたものであり、授業者一人一人が描く望ましい指導法を実践するため、自らの語り口に合った表現を見出すための対応集である。

1 場に応じた指導の工夫

1.1 原因をつかむ

人は、私語が多く落ち着かない雰囲気の中で話をするとき、

- ① その場にあった、話し出しを工夫する
 - ② 話し出しても、聞こうとする人が少ないとき、話しながら注目させようと力が入る
- 学校は、対象が生徒なので原因をつかみ改善が容易と思われがちだが、生徒個々の問題も含む複雑な面もあり実際は難しい。

教師は、原因を細かく分析して対応する時間

的余裕がないため経験で乗り切る。

どのような経験か、ここであなたが実践した授業について生徒がなぜざわついていたのか原因を探りたい。「…ので、しゃべっていたようだ。」を付け加えて読む。

- ① 授業始めに、本時の”めあて”が示されず、何をやるのかよく分かっていなかったので、しゃべっていたようだ。
- ② 教科書やノートを机に出すなどの授業準備ができていなかった…
- ③ 忘れ物をして、見せてもらっていた…
- ④ 説明が分かりづらかった(難しい説明)…
- ⑤ 授業自体がつまらないと感じた(授業形態が一本調子だった)…
- ⑥ 自分への個別指導がなかった…
- ⑦ 課題が早く終わったときの指示がなかった…
- ⑧ 授業形態(席を寄せ合う班活動など)に配慮した約束事が浸透されていなかった…
- ⑨ 生徒の活動を生かせる場がなかった…
- ⑩ 先生から褒められなかった…
- ⑪ 先生の発言が気になった…
- ⑫ 生徒同士で教え合うなどがなかった…
- ⑬ 何のために勉強するのか、学習の意義を見いだしていない…
- ⑭ 悩みごとがあった(友達・家庭)…
- ⑮ 睡眠不足が続いていた…
- ⑯ 日常での生徒と教師との関係がよくない…

教師の対応や指導法に原因があることのないようにしたい。

1.2 瞬時に状況をつかむ

指導のタイミングを見逃さない。集中させる瞬間(場面)、静かにさせる瞬間(場面)をしつかりと捉える(感じる)ことは重要である。

タイミングの見極めは、授業をすぐに立ち直せるか、長引かせてしまうかにかかってくる。

このことは、生徒たちに“聞く姿勢”が不足し始めているかどうかにも通じる。

(1) 本稿に関係する言葉 広辞苑より

しゃべる	数多くべらべらと話す。
会話	二人あるいは少人数で、向かい合って話す。
ざわつく	ざわざわする。そわそわする。
やかましい	騒がしい。静かでない。聞いていてもうるさく感じる。
騒がしい	物音や声などが、やかましい。心が落ち着かない。
うるさい	同じことが何度も繰り返されるので、いやになる状態。扱いに手間がかかり厄介。

(2) 学級の状況をつかむ

「ざわついている」を付け加えて読む。

- ① ざわついている数人とは誰なのか
- ② …多人数、特に誰なのか
- ② …授業は、すぐに再開可能な状況か
- ③ …授業は、すぐに再開できない状況か

(3) 生徒の状況をつかむ

「～、騒がしくなった（うるさくなった）」を付け加えて読む。

- ① 通常の席で、騒がしくなった（うるさくなった）
- ② 席を寄せ合うグループ学習で、…
- ③ 無意味なおしゃべりで、…
- ④ 授業内容とは無関係な話をしていて、…
- ⑤ 意図的な受けねらいで、…
- ⑥ 調子に乗った生徒に続くように話し出したので、…
- ⑦ 質問に対する受け答えが逸脱していて、…
- ⑧ 授業の進度を無視し、意図的に先生に話しかけてきて、…
- ⑨ 先生の質問内容が適切でないので、…
- ⑩ 席の近くに話しやすい生徒がいるので、

…

- ⑪ 席から離れた生徒に話しかけたので、

…

- ⑫ 周りに気を使わず、大声でしゃべっていたので、…

- ⑬ 隣の生徒が、受け答えでしゃべっていたので、…

- ⑭ 生徒にとって必要な会話で、…

- ⑮ 先生の質問に対して話し合っていて、…

ただし、落ち着いた雰囲気の中での突然のどよめきは、授業内容の充実から起きた生徒の反応であり、すぐに戻るものである。

(4) 他の状況をつかむ

- ① 困っているのは少人数の生徒か、多人数か。
- ② 他の生徒の物をいじったりしていないか
- ③ 物を投げたりしていないか
- ④ ガムを噛んでいないか
- ⑤ ケータイを使っていないか
- ⑥ 居眠り・ボーとしていないか
- ⑦ 他の授業者に対しても似た状況か

1・3 “原因”と“状況”を受けた対応例

落ち着かないときの“状況をつかむ”を載せたが、

- ・ほとんど全員がしゃべっていてざわついている
- ・立ち上がる生徒がいる
- ・授業を無視して大声を出す
- ・不必要な物を持ってきて、見せている
- ・話しかける生徒に、適度に対応している

など様々である。“原因”と“状況”を素早くつかみ、具体的対応をしなければならない。

(1) 授業に集中させるために

① 教師の姿勢

ア 教師の笑顔は、場の雰囲気を作る。笑顔で生徒に声をかけたい。そして、しっかりできている生徒を褒め、注意したい生徒に感じ取らせる。

イ 生徒との関係づくりでは

- ・相手の目を見てきちんと話す
- ・「一生懸命に教えているよ。」・「一人一人に目をかけているよ。」・「ひいきなんてしないよ。」を感じ取らせる
- ・守れないことには厳しく指導する
- ・思いやりをもって、丁寧に対応する

これらは、理想の教師像で挙げられる内容でもあるが、教師は常に見られているということでもある。

② 「興味深い→楽しい」授業を目指したい

授業がつまらなく感じたとき、集中できず落ち着かなくなる生徒が出るのは、当然である。

魅力ある授業を指すが、生徒は学級集団で授業を受けるため、どの生徒にもそのレベルにに応じて等しく受けられる授業が必要である。

ア 授業のはじめに、生徒の活動を揃えて進める配慮をし、全員が参加できる発問に工夫する。

イ 復習を授業の導入で行い、学習へのハードルを低くする。

ウ 指示・発問は、端的に行う。

エ まとめて行う注意点や要領などの確認数は、できる限り少なくする。できればポイントを一つに絞り集中させる。

オ 教師主導の授業のときでも、生徒が自発的に学習できる場を作る。

カ “聞く”，“書く”，“考える”，“話す”，“確かめる”にかかる時間の各々の配当と内容を明確にする。

キ 「教師 対 集団」より、「教師 と 個人」でやりとりをしている感覚を持たせる。個人名をしっかりと呼んであげたい。

③ 指導の工夫

生徒自身が “自ら気づき・自ら考える” 授業の展開にしたい。

ア “聞く”，“書く”，“考える”，“話す”，“確かめる” など、多様な学習活動の切り替

えはスムーズにし、集中力を途切れさせない。

イ 授業中の展開で、〇〇タイムなど、学習内容を明確にする。

ウ 教材として適切な具体物を示す。

エ 繰り返すことで、聞く力をつける。教師や級友の発言が、何であったかをあえて繰り返し問ひかけ、注意深く聞くことの習慣化を図る。

オ “クイズ” などを取り入れた後、指示したことを再度考えさせる。

カ 指名は、まんべんなくしていくが、固定化しないように工夫する。

キ 発言が重なったり、関連のない発言があるとき、それらを受けつつ授業を進める手法を考える。

“教え合う” ことで自らを磨くことができ、コミュニケーション力も高まるとされている。しかし、この“教え合う” の指導は簡単ではない。指導法を各々で確立し、意識して授業で展開していくことが大切である。

教師の頑張りで、支え合いの心が育つ。

④ 発問の工夫

発問内容は、一生懸命に考える。多くの生徒に答えさせて充実感を味わわせるため、

・授業に関連した発問

・身近な（日常化に関連の）内容の発問をすることで、授業に入りやすい受け止めをさせる。その際、発問の内容は、できるだけ答えが限定されない、幅広いものにしたい。

(2) 生徒たちのざわつき状況でやや心配次の比較的、集中しやすい場を設定する。

ア 小テスト、漢字や計算などのドリル学習

イ 時間を区切った活動

ウ 実習・実験

エ 作品作り

オ 実技

カ 作業

これらは、どの生徒にも“課題の明確化” がなされているので落ち着き、集中ができるので

ざわつくことはないといってよい。課題が明確であることは、重要なポイントである。もちろん、発問の工夫によっても生み出せる。

一斉授業であっても、

ア 例えば、教科書の指定した範囲を起立・音読させ、終わった生徒から座らせる方法があり、作業的学習である。

イ 活動内容ははっきり伝え、黙って作業に取り組むように指示する。この時、生徒がスッと作業に入れる語りの表現も大切である。

ウ 実習の内容に取り組んでいる生徒たちを観察し、課題を再構築する。どの部分で理解が進まなかったのか、適切な発問ができるように考えを整理する。

(3) 生徒たちが騒がしく、うるさい状況で深刻

① いったん授業を中断するとき

原因となる生徒が数人いても、全体の状況から核となる生徒が見極められ、個別対応から始めるという方法と、全体に「なぜ今、授業が中断しているのか。」を説諭したり、気付かせる方法があるが、どちらをとるかは、状況判断になる。

「今、何をする時間なのか？」などの言葉かけは、効果的ではないことが多い。本時や教科学習の意義を見いだせていない場合があるからであり、騒がしくしていることは分かっているのである。

「他の生徒への迷惑になっていた。静かにしよう。」と自覚させる指導を心がけたい。

授業を再開したら、該当の生徒たちの何気ない発言にも授業の中で受け止め、授業に参加している意識を持たせる。

② 受容と切り替え

ア 話につきあい、サッと打ち切る

日常的に落ち着かない生徒には、ときには一定時間話につきあい、間を見てサッと打ち切る。ただし、その生徒には黒板の問題や教科書を読ませるなどをしてキッカ

ケを作り全員に集中させる。

生徒全員と教師で作りに上げていく授業にこそ落ち着きのない生徒本人も気づく。周りの生徒も一体感を感じ、学級集団の意義も徐々に理解されていく。

イ 話題の工夫

生徒たちが興味のあること（芸能・スポーツ・・・）を話題にしたり、生徒とのやり取りにも入れて教師の方に意識を向かせることも大切な手法である。

ウ 個別指導も必要に応じて

個別指導の時間を作り、生徒の学習態度の在り方について問いかける。生徒自身、周りへの迷惑に気づいていないときは、特に個別対応に切り替える。

授業終了後、家での出来事や様子なども聞き、よい点を褒めつつ、なぜそのような態度になってしまうのか聞いてみる。

(4) テンポのよい授業の工夫

① 声は、はっきりと前に出す

ア 指示は、

- ・具体的にイメージでき
- ・短い言葉で
- ・はっきりと

イ パターン化した展開で、手際よく行う。

ウ 教室に早く行けたら、開始前から呼びかける。

エ 視覚的な教材や作業的・活動的なものを取り入れて、雰囲気を切り替える。

② 指示は、一度しか提示しないことを言うておくが、配慮もする。

③ 活動時間をはっきりとさせるため、タイマーを有効利用する。

1・4 意図的に作る”間”や”メリハリ”

(1) 話し方例

“ていねい言葉”を基に、“ふだん言葉”を交えて授業を展開したい。

バランスよくこの使い分けをし、

ア 話すスピードを速めたり、ゆっくりに

- する。
- イ 声のトーン(口調・語気)にも変化を付ける。
- あえて声のトーンを下げ、声量を少なくし、丁寧にしゃべる。話す速度も落とす。初めて取り入れる人にとっては、勇気・決断が必要だが、上手くいったときは、効果は大である。
- ウ 特に強調したいことは、はっきり・ゆつたりと話す。
- エ 意図的な大きな声・小さな声で話す。
- オ 通常より丁寧に話すことで、「今はしっかりやるべき時間。」と気づかせ、自覚の雰囲気を作る。静かになったら、即座に寝る。
- カ 肯定的な言葉を使う。
(～しよう、～するとよいなど)
- キ 大きな声は威圧につながる。
- ク 差別や侮蔑的な言葉に配慮する。
- ケ 「…んー」「…えーと」などのないように、受け答えは、素早く。
- コ どう分かりやすく伝えるかを常に考え、イメージしやすいように、かみくだいて話す。

1・5 《授業のはじめ》での工夫

(1) 《めあて》は授業の始めに

授業のはじまりでは、生徒がすでに心と体の準備が整っているかないかで学級の雰囲気に違いがでてくる。

特に、実技教科後の教室では、このことを承知して対応すべきで、授業の導入時、「しっかり勉強しよう。」と切り替えさせる場づくりは大切である。

教師は、生徒が本時の“めあてと内容”は当然分かっているだろうと思い込み、勘違いしていることがあることを認識したい。教師は、準備をするので、当然理解しているが、生徒は違う。しかも、前時内容をしっかりと思い出す生徒は意外に少ないのである。

したがって、

- ・授業がイメージできるように“本時のめあては、授業の始めに提示”したい。
- ・めあて提示は、教師のねらいより、さらに具体的で端的でなければ理解されない。

板書することで、「この時間は何をするのか」に気づくように配慮し、授業の途中でも“めあて確認”をし、生徒の意識と“教師のねらい”がずれないようにしたい。

(2) 《授業のはじめ》の対応例

教師自身が、毎時間「これから授業をする。」という構えをしっかりと持つことである。

まずは、挨拶“気をつけ、礼”は、しっかりさせ、自らも「お願いします。」と挨拶をし、教師が同じ目線にいることを感じさせる。

始まりの指導が行き届かない場合、荒れの兆候の可能性もある。

① 生徒が落ち着かないとき、時には

ア 授業開始時、「机を(床の印に合わせて)まっすぐにしてください。」と直させて、授業へ向かわせる。

イ はじめの5分間を、生徒全員が一斉に、しかも静かに取り組む内容を設定する

- ・落ち着きのない生徒が多い中学校では、国語科教員全員の話し合いで全年授業開始時に小テストを年間通して行い、成果を上げている。

- ・ピクチャーカードや記事などの提示

- ・フラッシュ型教材で声を出させる

“フラッシュ型教材”は、複数のカードを順に素早く見せて、発声させる方式で、中学校の英語授業でよく利用されている。他の教科でも応用は可能である。

ウ 授業のはじめに全員起立させ、

- ・「○ページを開いたら座りなさい。」

- ・「○行目まで3回音読して座りなさい。」

ページを開いたら、○○を探せたらなどの指示をし、周りの生徒の協力もさせる。

エ いきなり、日常の話題や教師の体験談

等を話して雰囲気を作る。

オ 授業始めの挨拶なしに、

- ・いきなり、日づけやページ数を板書
- ・気づいて、生徒は板書をノートにとる
- ・そこで、挨拶の指示

1・6 《授業のなか・まとめ》での工夫

(1) 「待つ・間をつくり」の工夫

教師が無言になって「待つ」場合、効果がでないとなすすます状況は悪くなる。

「待つ」を行うことで効果があるという正しく判断ができる眼を持たなければならない。このときの「待つ」は教育的意義のあるものとして受け止めることができる。

① 落ち着きのない状況が見えたとき

- ・話をやめ、生徒が気づくまで静かに待ち
- ・話をしている生徒の方を見る
- ・目線の強さには注意する
- ・「今、何をする時間？」の問いかけは、生徒も分かっているのではない

② 教師の指導が通る日々の状況で、今日は「騒がしいな。」と感じたとき

- ・時計を見ながら待つ
- ・「やっと、静かになった。○分かったね。」
- ・「何がいけなかったのか。」を、学級課題として考えさせたい
- ・周りの生徒がどのような対応ができたのかも考えさせる

③ 気づかせる工夫として

- ・あえて、小さな声で話し
- ・静かに待つ
- ・落ち着かない生徒の近くに行く
- ・大切な指示は板書する
- ・顔を上げさせ、黒板を注目させる
- ・あえてニコニコしながら

④ 間をとる

- ・動作を止め
- ・話すのをやめる
- ・じっと考え込むふりをしたり

- ・騒がしい生徒を静かに見つめて
- ・流れに変化をつけ、注目させる
- ・状況を自覚させ、「静かにしよう！」

という自製の声を引き出す

⑤ 立ち位置を変える

- ・話をする立ち位置をドア付近に移動し
- ・話すことを一時止め
- ・声のトーンを下げ
- ・話すスピードをゆっくりにする

教室内の雰囲気を変化させるよう心がける。

⑥ 『待つ』ことで、期待する効果

ア 教師が黙することで、生徒たちがこの状況はまずいと気づき、静かになっていく。

生徒と教師との信頼関係があることが前提だが、頻繁に使うと効果は薄い。

イ 待った後、単調に話し続けるのではなく、言葉と言葉の微妙な“間”や“抑揚”に配慮して話す効果的である。

ウ 静かに待った後、授業を再開するが、課題のある生徒にはあらかじめ考えた個別の学習支援が行えるとよい。

間やしぐさを交える上手な表現は、教師としての個性にもなる。

(2) その他の工夫

① カウントダウン

5, 4, 3, …とカウントダウンで注目させる。

② 音の利用

手をたたいたり、黒板をコンコンとノック動作をするなど、音を出し注意を促す。

1・7 承知しておきたいこと

(1) 強調する

手をたたくなどで、顔を上げさせ注目したら

「ここは、今日のポイントですよ。」

「ここは、難しいので集中して！」

「これから話すことをよく聞いて！」

よく聞いていないと自分も周りの人も困る、という感覚を感じさせ自発的姿勢を引き出す。

それでもしゃべっている生徒にはあえて指名・質問などして授業へ目を向けさせる。

「大切なことをやっているけど、大丈夫かい。もう一度言うので答えて!」

(2) 音読の大切さを伝える

「黙読は、脳にインプット活動が生じるが、音読はインプットとアウトプットの両面があるので理解が深まる。だから、声を出すことはいいのです。積極的にやりましょう。」

(3) 室内と屋外

室内は、声が通りやすい。教室という限られたスペースであるため、全体を把握しやすい。

一方、屋外では、生徒たちにとって興味のわくものが数多くあるので、集中させるために、座らせて話を聞かせる。座った体勢により教師からは全生徒の顔が見える。生徒も教師や目標物をしっかりと視界に捉えることができる。

さらには、生徒から見て目に映るものが気になると、大切な指導・指示が頭に入らないため、集合方向にも注意すべきである。

2 約束事の確立

学校は、一人一人の生徒にとって居心地のいい居場所でなければならない。

そのためには、次の3点が必要である。

- ① 生徒一人一人を生かす教科研究が授業で生かされ、互いが尊重して磨き合うための“約束事づくり”
- ② 定着のために“約束事の維持”
- ③ 生徒たちが主体的に取り組むための“約束事の改善”

指導力のある先生は、

“ていねい言葉”と“ふだん言葉”

を上手に使い分け、言葉の力で集中させている。さらに、

“注意言葉”より、“気づき言葉”

を意識的に使い、約束事を自然に受け止めさせて教師の指導ペースにのせ、生徒にとって魅力ある授業にしている。

2・1 指導の在り方の確認

(1) 年度初めの授業

年度初めの各教科の時間では、授業内容と評価、授業の意義、授業の受け方(約束事)等を説明する。

静かに話を聞くことや自発的な姿勢なども約束事の一つとしての説明になる。しかし、徹底したいことが生徒にとって適切であるかどうかは十分に吟味しておく必要がある。

(2) 定着は

授業の初日から何回目で定着させるのかを見通しておく。また、根気強く定着させていくが、1～2ヶ月単位で確認し、定着の継続を図ることも忘れてはいけない。

2・2 約束事の具体例

(1) 授業の『はじめ』の場づくり

次の「聞く姿勢」は、いくつ定着させますか。

- ① 生徒が教科書等の準備をしていること
- ② 授業に必要ないものは片付けてあること
- ③ チャイムが鳴ったら、席に着いていること
- ④ 背筋を伸ばして座っていること
- ⑤ 生徒同士で声を掛け合っていること
- ⑥ 先生の方を注目していること

(2) 指示言葉は、“約束用語”

① 用語として表現する

「静かにしろ!」、「うるさいぞ!」は、ストレートな“**注意言葉**”である。

“**注意言葉**”は、次第に“先生の口癖”程度にしか受け止められなくなり、大きな声でやっとな静かになる。しかも、時間がかかる。生徒たちには甘さが蔓延し、なぜ言われているのか理解されず、逆に「うるせえな!」とつぶやき声(時には、大きな声)で返されたりし、授業が思うように進まない状況に陥る。

「静かにしないと大切なことを聞き落とすよ。」と気付かせる、そんな言葉である“**気づき言葉**”を使いたい。

“**気づき言葉**”を端的な表現で使う。

- ・「前を向いて！」
- ・「顔を上げて！」
- ・「黒板に注目！」
- ・「ペンを置いて！」
- ・「背筋を伸ばす！」
- ・「こちらに注目！」

集中できず騒がしくなりそうなとき、騒がしくなってきたときに使うが、比較的頻繁に使っても効果はある。

② 集団行動の指導

中学校学習指導要領の保健体育には、「…安全な集団としての行動ができるようにするための指導については、…適切に行う。」と示されている。

体育実技での“約束用語”としての実践例を紹介する。

体育実技では、「集合!」・「はじめ!」などの指示用語を使うが、特に端的な表現が必要である。また、運動場で拡がって活動している生徒たちには、短い笛の合図で「注目!」、長く吹くと「集合!」と使い分けることもできる。

スムーズで効率的な指導を目指し、説明に時間がかかるときは「集合!・腰を下ろす!」、1分以内の要点説明ならば、散らばっている生徒たちにその場で「注目!・しゃがむ!」と使い分ける方法もある。ボール競技の練習場面では効果的である。

これらの指示用語は、

(ア) 聞くための姿勢

(イ) 集合体形までイメージ

をさせていることから、特に、教科の実習的活動・学年や全校集会・体育的行事・旅行や集団宿泊の行事等の屋外での活動、その他緊急避難時の適切で冷静な指示を行う危機管理の面からも、学校教職員が共通の指示体制ができるとよい。

③ 指示言葉は、シンプルに

分かりやすい言葉でシンプルに提示する。
・「3人組を作る!」

- ・「1人2つの意見を言う!」
- ・「マーカーで印!」
- ・「グループ毎に、意見を1つ選ぶ!」

各教科で教師が示範するときも同様である。

「見せるのは1回だけ!」

などで集中して観察させ、「うまくやるぞ!」と、意欲を引き出す。

(3) 生徒に意識させる関わり (約束事)

① 見通しを持たせる言葉

「あと3分経ったら、次のことをやります」
この、「次のこと」を意識させることで、学習の「構え」の必要性を自覚させる。

② 「質問は、説明が終わった後に!」・「人が発表しているときには、話をしない。」などの言葉かけで意識づけが必要だが、小学校では常に指導しているが、中学校ではしなくなっている傾向がある。

③ 全校に指示するときの約束事は、さらに大切である。避難時など、どの場面でも、どの先生でも指導できることになる。

④ 教師が一方向的に決めない約束事もある。「〇〇については、どのように協力していくのか?」など、一緒に約束事を作っていくこともよい。

⑤ 騒がしくなったとき、あらかじめ静かにする合図や表示物等を決めておき、これを掲げる方法もある。

3 信頼関係の構築

3・1 信頼関係で望ましい雰囲気

生徒は、教科によって、分野によって、先生によってなど、様々な場で好き嫌いを感じる。あの先生の授業が好きで、得意ではないが一生懸命やっているという生徒は大勢いる。

逆もある。あきらめ顔が目映に映りませんか。

(1) 生徒の学習意欲

生徒は、自分たちのことを見てくれている、考えてくれていると感じることで意

欲的になる。

心を読み取ろうとしている。生徒の困り感に気づこうとしている。生徒たちの声を聞こうとする姿勢は何より大切である。

(2) 褒める

人は、よくできたときや頑張ったときには、褒めて・認めて・自信を持たせたいと思う。

「私も、褒められたいな!」と感ずることはよい影響になる。

- ・そっと褒める
- ・数人の前で褒める
- ・学級・学年・全校の前で褒める

など、様々な褒め方がある。さらには、ニコニコして、柔和な顔で、怖い顔で、力んだ顔でなど、表情豊かな褒める顔はたくさんある。

(3) 褒めない

褒めて伸ばすことは、大切なことであるが、適当にやってそれなりにできた生徒に対して「頑張った。よくできた。」と声を掛けてしまうと、「妥協」の仕方を覚えることになりかねない。

褒めるとは、本気の頑張りに対してであり、褒める見極めも大切である。

(4) 叱るとき

止むを得ず、授業中に怒鳴ったり、叱ったりすると、生徒の受け止めは様々。本来の信頼関係とは違う状況になることが多い。

説諭(説き諭す)と叱責(叱り責める)は、違うことを承知したい。叱責したのならば、その後は説諭で、生徒自らが省みる姿勢を作らせたい。

- ・人前で叱られると、人格を否定されたと感じる
- ・個別に叱られるとき、立ち話的か別室かで受け止めに違いが出る
- ・集団を叱るとき、教師と目が合った生徒は個人として叱られていると感じる
- ・集団を叱ると、効果に差異が生じる

- ・叱責したときほど、その生徒へのフォローに時間をかけなければならない

4 まとめ

落ち着かない生徒たちを集中させるための具体的な手立ての例を述べてきました。

授業は実態に合った指導や指導技術などが絡み合ってよい授業になります。指導力のある教師は、励まし、時に叱咤し、その中で共に頑張る姿勢を示し続け、生徒たちが前向きに受け止めて進んでいける環境を作りながら授業を展開していきます。

しかし、教師間においては相談しやすい環境を日頃から整えておかなければ、教師は孤立し事態が悪化することがあります。

学級経営においても、学級担任が進めるが一人だけで行うものでもなく、直接生徒たちに接する先生方との指導の共有化が大切であることを現場の教師は感じています。

“はじめに”で申し上げましたが、授業者一人一人が描く望ましい指導法を実践するため、自らの語り口に合った表現をこの“学習活動が成立するための雰囲気づくり”から見出していくためにまとめたものですが、学校としての指導体制の共有化も重要な考え方であります。

私が担当している教科教育法(保健体育)では、〇〇教育と呼ばれる配慮すべき内容の一端や板書法なども絡ませ、本稿の“聞く姿勢づくりから”を取り入れて教育実習前の授業として講座を進めています。

【引用文献】

文部科学省:『生徒指導提要』

2010(平成22)年3月 p.6

広辞苑